

ドメスティック・バイオレンスにさらされる子どもたち

－DV による影響と暴力の連鎖の言説の考察－

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター

ドメスティック・バイオレンス（以下、DV）と子どもの虐待は密接な関わりがあるにもかかわらず、別の視点で捉えられ別々に対策がとられていた。DV の問題において子どもも暴力にさらされることで子どもは、様々な影響を受けることとなるが、被害を受けた女性に関する問題の影に隠れてしまい、これまで忘れられた存在であったと言える。現在 DV に問題において子どもの受ける影響やその環境について言われるようになり、今回の改正児童虐待防止法では第二条第四項において DV を目撃することが心理的虐待にあたると定義されるに至った。本稿では、暴力にさらされる子どもたちに関する文献や論文をもとに DV 家庭における子どもの存在がどのように語られ、子どもが DV によって受ける影響や子どもと暴力に関連した問題がどのように捉えられているのかをまとめ DV 家庭における子どもの存在を再構成し、考察の試みを行った。

DV にさらされたり目撃することによる子どもの影響や世代間連鎖の問題については、関心の高いテーマであり、様々な分野の専門家や研究者によって DV 家庭における子どもの問題が取り上げられてきている。それらの言説を分析してみると、家庭内に DV があることによって子どもはどのような環境に置かれ、傷つき影響を受けるのかについて語られている一方で、その影響や世代間連鎖の問題が繰り返し記述されることによって、直線的な因果関係が強調され、暴力に親和性の高いリスク集団であるとみなすような語り方がなされている傾向が見られた。DV によって子どもが受ける影響は、様々な要因によって異なる。また世代間で暴力が連鎖していくという問題もそのようなケースもあれば、暴力の連鎖が起こらないケースもあり一様に語ることが難しい。子どもの性別や年齢、受けた暴力の程度や頻度、期間、子どもの性格、ストレスに対する抵抗力や母親、きょうだいなどの他の家族との関係性などによってその影響の大きさは異なる。そして、発達過程における家庭以外での人との出会いや経験、関係性などによって異なるからである。子どもの影響や世代間連鎖について語る場合には、様々な個別性や変数があることを踏まえた上で直線的な因果関係を強調するような表現を避け暴力が起こらなかったケースの個別性にも焦点を当てるような多様な語り方がなされることが必要なことなのではないだろうか。

そのような言説の考察をふまえて、子どもが受ける影響に特化した視点ではなく、子どもへの影響と子どもの持つ回復力の両面に焦点を当てたアプローチが求められ、そのような視点を包含した行政と民間の相互扶助の関係での子どもへの支援、システムの構築が求められているということが挙げられる。